



鈴木 猛史

AFP = 時事

特集

ピョンチャン

平昌冬季

オリンピック・パラリンピック



dpa/ 時事通信フォト

2月から3月にかけて、韓国で開催された平昌冬季オリンピック・パラリンピックに本町ゆかりの選手が出場しました。

本町ゆかりの選手が出場

2月に開催された平昌冬季オリンピックには、フリースタイルスキー男子モーグルの遠藤尚選手(忍建設所属、猪苗代高卒)、ノルディックスキー複合の渡部剛弘選手(ガリウム所属、猪苗代高卒)が日本代表に選ばれました。

遠藤尚選手は、2月12日に行われた男子モーグル決勝1回目で高得点をたたき出し、1位で決勝の2回目に進出しました。しかし、決勝の2回目で惜しくも転倒。念願のメダルには手が届きませんでした。

渡部選手は、現地で行われた公式練習で本来の調子が戻らず最終メンバーから外れ、残念ながら本大会での出場はできませんでした。

3月に開かれた平昌冬季パラリンピックには、アルペンスキー男子座位の鈴木猛史選手(KYB所属、猪苗代高卒)が4大会連続での出場を果たしました。

前回のソチ大会では金と銅、前々のバンクーバー大会では銅メダルを獲得した鈴木選手。連続でのメダル獲得への重圧と戦いながら臨んだ本大会では、スーパー複合と大回転の2種目で4位入賞に輝きました。

メダル獲得に向け闘志を燃やす

序盤戦の滑降は9位、スーパー大回転は13位と高速系の種目では低調だった鈴木選手。3種目目のスーパー複合では、後半の回転で全体2位のタイムをマークし、総合で4位となります。

3月14日に行われた大回転では、気温が上がって雪面が荒れ、転倒者が相次ぐ中、巧みなターンを見せ4位に入ります。鈴木選手は、試合を重ねるごとに次第に調子を取り戻し、得意種目としている回転に向け「負けられない」と闘志を燃やしました。

このままでは終われない

鈴木選手は3月17日、5種目目となる回転に臨みます。滑走1回目、鈴木選手はストックの代わりに持つアウトリガーを駆使し、最速のラインを果敢に攻めますが、中盤でアウトリガーが旗門に引っ掛かり転倒。惜しくも途中棄権となりました。

鈴木選手は帰国後のインタビューで「町民の皆さん、ご声援ありがとうございました。残念ながらメダルを獲ることができませんでしたが、このまま終わることはできません。次の4年後を目指して頑張りますので、応援をお願いします」と話し、次に開催される北京冬季パラリンピックを見据えています。



SAJ30 承認第 00682 号

Interview

オリンピックでのレースを終えた遠藤選手に
オリンピックの感想や今後の予定について
伺いました

Sho Endo

遠藤尚



© T-world/Taro Tampo
SAJ30 承認第 00678 号

—平昌オリンピックを振り返ると
今季を現役最後と心に決め、集大成として臨んだシーズンでした。オリンピックを終え、「本当にやりきった」という感覚が一番です。これまでに何度もけがをしてきましたし、苦しい時期を過ごしてきました。今思い返してみると「あの時こうすれば良かったな」という気持ちがないわけではないのですが、限りなくゼロに近いです。決勝で転んでしまったことは残念ですが、これまでやってきたことには自信がありました。

—日本チームとしてメダルを一つ獲得できたこと（※原大智選手が銅メダル）は、日本モーグル界の歴史の中でも大きな一歩だったと思います。

—決勝2回目でも攻めの姿勢を貫きましたね
チーム関係者からも「決勝2回目であんなに攻めなくても良かったんじゃないか」という声がありました。もしかしたら、メダルを獲るだけならばそれで良かったかもしれません。でも、私は金メダルを獲ることだけが目標でした。決勝2回目でも1位通過できなかったら、金メダルを獲ることは難しいと考えていました。だから後悔はしていません。

—これまでに何度もけがを乗り越えてきましたが、けがの影響は？
実は、公式トレーニングの2日目

—転倒して、右肩の靭帯を痛めていました。恐らく、靭帯が切れてしまったと思います。本番のエアでグラブの動作（※スキー板をつかむ動作）をしなかったのは、握力がなくなっていたからなんです。でも、グラブがなくてもメダルが獲れるという確信がありましたし、試合への影響はありませんでした。

—猪苗代はどんな場所ですか？
スキーを始めたのはもちろん猪苗代です。モーグルを始めたきっかけも猪苗代です。リステル相談役の鈴木長治さんが立ち上げた「チームリステルジュニア」の第1期生として、11歳の時からモーグルを本格的に始めました。それからの16年間の競技人生で、猪苗代は私の支えとなる場所です。

—先日、平昌に行く前に鈴木長治さんに会う機会がありました。その時に「今までフリースタイルを続けてくれて良かった」と話していただきました。私としては、福島、猪苗代を離れて仙台を拠点として活動することになったので、嫌な思いをさせてしまったのではと思っていましたが、そう話していただいたことがうれしかったです。

—スポンサーの中村忍社長との出会いも福島でしたし、全日本の高野弥寸志コーチ、美鳥さん夫婦にもとてもお世話になりました。

—猪苗代の人たちをはじめ、たくさ

競技人生を懸けて臨んだ最後のオリンピック

バンクーバー、ソチ冬季オリンピックに続き、3大会連続でのオリンピック出場を果たした遠藤尚選手。長年にわたり日本男子モーグル界をリードしてきた遠藤選手は、今季をもって引退することを表明。競技人生の集大成として平昌五輪に臨みました。

2月9日に行われた予選1回目。第1エアの着地でスキー板がコブの深い穴に取られ、バランスを崩します。これが後半のターンにも影響を及ぼし30人中13位となり、12日に行われる予選2回目で決勝を目指すこととなりました。遠藤選手は「次のレースではしっかり滑って決勝に進みたい」と前を向きました。

迎えた予選2回目。遠藤選手は冷静な滑りを見せ、決勝1回目に進出します。予選を通過した20人で争う決勝1回目では82・72点の高得点をマークして1位で決勝2回目に進みます。12人による決勝2回目では、遠藤選手らしい攻めの姿勢で果敢にコブに挑みましたが、惜しくも転倒6人でメダルを競う最終の決勝3回目には進めませんでした。

パブリックビューイングの会場となったカメリーナには、大勢の町民らが駆け付け、遠藤選手に惜しみない拍手を送りました。

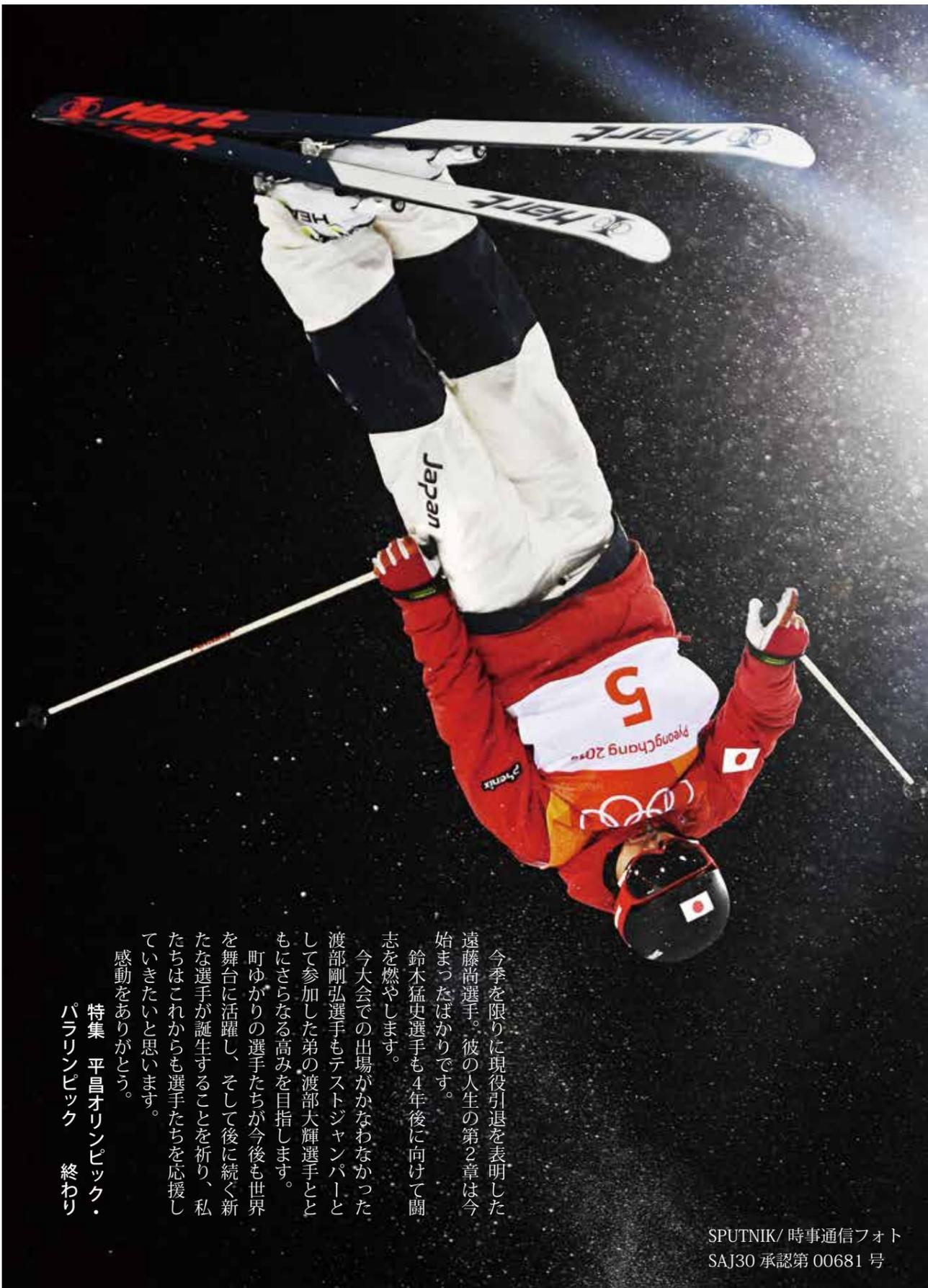
—引退後の予定は？
まずは長年支えていただいた忍建設に恩返しをしたいので、これからは一社員として仙台でしっかり働きたいと思います。

—スキーのおかげでここまで来ることができました。私にやれることは限られているとは思いますが、猪苗代でスキーを始める子どもたちが増えるような活動をしていきたいです。



© T-world/Taro Tampo
SAJ30 承認第 00679 号

レース後、互いに声を掛け合う忍建設の中村忍社長(左)と遠藤選手



国際A級審判員の高野美鳥さん フリースタイルスキー競技の 審判員として オリンピックの舞台に

審判員としてオリンピックの舞台に

高野美鳥さん。彼女は、フリースタイルスキーの審判員としてオリンピックの舞台に立ちました。

高野さんは東京都出身。スキーは3歳の頃から始めました。フリースタイルスキーとの出会いは高校生の時。友人から「面白いスキーがあるからやってみないか」と誘われ、モーターの世界に飛び込みます。

「当時の日本では、全く『モーグル』という競技が知られていませんでしたし、私自身もモーグルのことはよく分かっていませんでした。初めて国内で開催されたモーグル大会に友だちと参加したんですが、どういふふう滑るかもわかりませんでした。

高野 美鳥さん(新北町)

Profile たかの・みどり

東京都出身。フリースタイルスキー国際A級審判員。高校生からフリースタイルスキーを始め。日本女子フリースタイルスキーの草分け的存在。北塩原村のスキー場に勤務する傍ら、審判員としての活動を繰り広げる。夫の弥寸志さんは全日本スキー連盟フリースタイルスキー・モーグルヘッドコーチやフリースタイル部長などを歴任。夫婦二人三脚で日本スキー界の発展に携わる。趣味はスキー、ゴルフ。

した。今で言う不整地の大回転のように滑ったのですが、後になってどうやらモーグルはコブを細かくターンするらしい、と分かったくらいです」と高野さんは懐かしそうに当時を振り返ります。

フリースタイルスキーを本格的に始めた高野さんは、モーグルだけでなく、エアリアルやアクロにも挑戦しました。その後、国内トップクラスの選手に上り詰めた高野さん。世界中のスキー場を転戦している中で、高野さんはスキー場の運営に興味を持ち始めます。そして約30年前に猪苗代町への移住を決意。スキー場運営に関わる傍ら、審判員の道に進みました。

オリンピックの舞台に立つまでは、長い道のりが待っていました。国内審判の資格取得から始まり、海外で開かれる研修会や試験に参加しながら、国際審判資格の取得を目指しました。さまざまなカテゴリーの資格を取得するためには、審判としての試合経験が必要になります。しかし、日本に比べると国際レベルの試合を経験することがほとんどできません。そこで、選手時代のように北米やヨーロッパで開催されるワールドカップに参加して経験を積んできました。

地道な努力が報われ、高野さんはついに平昌オリンピックでの審判員の座をつかみます。

「オリンピックが決まってからは、ずっと緊張感がありました」と話す高野さん。審判はヘッドジャッジを含めて8人で編成されています。このチームで1年前の平昌ワールドカップの審判を行ったり、世界各地で開かれる研修やテストを受けたりし、万全の態勢でオリンピックに臨みました。

「初めて経験するオリンピックでしたが、マニュアルに沿って普段通りの審査ができたと思います」と高野さんはオリンピックを振り返ります。

「今、審判員として活動できるのは、職場の人たちはもちろん、たくさんの人たちの支えのおかげです。先日、海外に遠征した時に猪苗代で大雪が降ったんですが、近所の人から『ちゃんとし除雪してあるから心配いらないよ』と連絡をいただきました」と高野さんは笑顔で話します。

高野さんは「これからも審判員として活動しながら、この福島から遠藤選手のようなオリンピック選手を輩出できるよう、スキーに関わっていききたいです」と話しました。

今季を限りに現役引退を表明した遠藤尚選手。彼の人生の第2章は今始まったばかりです。

鈴木猛史選手も4年後に向けて闘志を燃やします。

今大会での出場がかなわなかった渡部剛弘選手もテストジャンパーとして参加した弟の渡部大輝選手とともにさらなる高みを目指します。

町ゆかりの選手たちが今後も世界を舞台に活躍し、そして後に続く新たな選手が誕生することを祈り、私たちはこれからも選手たちを応援していきたいと思えます。

感動をありがとう。

特集 平昌オリンピック・パラリンピック 終わり

SPUTNIK/時事通信フォト
SAJ30 承認第 00681 号